

[書評]

乗松亨平著

『リアリズムの条件

ロシア近代文学の成立と植民地表象』

水声社, 2009年(338頁)

安達大輔

本書は(複数形で語られるべき)19世紀ロシア文学史のすぐれた教科書であり、同時に、より重要なことだが、教育への志の書である。教科書を、複雑な情報のある種の権威をもって縮減するためのツール、知の見取り図として、一方、それをういたコミュニケーションの創出を教育として区別することができるならば。物事の感じ方や日常の何気ない挙措に言及することで「私(たち)」というカテゴリーに閉じ込める力、その力を構成する諸条件をできるだけ言葉によって明るみに出し、閉域をむしろ他者と関係を結ぶためのチャンスへと変えること——ロシア文学を研究する制度にとどまることの意味が、ここではナイーブで心優しく、しかし、しなやかな強度をもって思考されている。

閉じた空間を内破して教育の新たな可能性を探る試みは突然現れたわけではない。本書でも幾度か共感をもって参照されている番場俊が、桑野隆の本の書評に際してその著者を「よき教師」と呼ぶとき、それはかなり意識的なものだ。<sup>1</sup> 初期の論稿において、「ポストモダニズム(!)の難解な文体」というレッテルを貼られるとか、無視してやり過ぎされるとかといった扱いをしばしば受けながらも、番場が間違いなく従来のロシア文学研究に突きつけたものは、「なぜこのテキストを研究するのか」という問題意識であったように思う。けれどもそれは現在の視点から回顧するとよく見えてくるのであって、当時そうした危機感が明示的に語られることはなかった。その番場が、近年はみずからも教育的な配慮を前景化させている。自身の問題設定が可能になる条件そのものを歴史的に考察する必要がある、より直截な文体によって説かれるという事態<sup>2</sup>は、このあいだの(ロシア)文学研究を取り巻く状況の変化を如実に指し示しているように思える。

まず目に付くのは、作家・作品論を中心とした研究を国民文学の枠内で行うことの、そ

<sup>1</sup> 書評：番場俊「桑野隆『バフチンと全体主義：20世紀ロシアの文化と権力』『ロシア語ロシア文学研究』第36号，2004年，161頁。

<sup>2</sup> 特に、番場俊「19世紀小説と現在」『19世紀ロシア文学という現在(「スラブ・ユーラシア学の構築」研究報告集 第10号)』北海道大学スラブ研究センター，2005年。

の意義と可能性を問う動きである。<sup>3</sup> 脱構築は実際に起きている。テキストの意味の決定不可能性は、従来支配的であった解釈学的伝統を、際限のない意味当てゲームか、あるいは逆に社会・文化・性的差異をめぐる政治的な交渉の場としての読みの力学へと還元してしまった。特定のテキストの特権視が疑われ、あらゆるものがテキストであるというフラットな状態が出現したゆえに、ある作家の作品を研究対象として選ぶ、その選択の理由が問われることになる。「文学史」を持ち出してくる回答は、制度の内外でかつてのオーラを失っている。国民国家という想像の共同体を支えてきた「国家」と「言語」の結びつきが必ずしも自明でなくなりつつある状況で、なぜ「ロシア」かつ「文学」という枠組みなのか。すでに古典として評価の定まった作家・作品をテーマに選ぶ者はさらなる苦境に立たされる。伝統的な「学問的誠実さ」の観念が、蓄積された膨大な研究文献を読みこなすことを義務付ける一方で、そうしたアカデミックな制度こそが人々を閉塞させていた閉域なのではないかという疑念によって、自らの拠って立つ文学史という足場自体がぐらつく。「いまだ知られていない」作家・作品を紹介するようなタイプの研究もまた、それが有名な「將軍たち」の文学史を前提としその反転としてある限りで、こうした問いと無関係ではないだろう。

回答はさまざまでありうる。ある種の普遍性を持った、「現代にも通じる」ものとしてのテキストの再発見。文学テキストを、それが生産された同時代の文化状況をよく知るための歴史資料の一部として扱うこと。あるいは「ロシア」や「文学」という枠にこだわらず、あらゆる時代・地域の多様なテキストとコラージュしてゆくことによる越境……

だが、より深刻な問題は、意味するものと意味されるものの恣意的な結びつき、すなわち意味作用を問う制度というものが、その終焉を迎えつつあるのではないか、という気配が、研究共同体の内外でそこはかとなく感じられることだ。意味を正確に理解しようとする志向を必ずしも前提としないメディアの氾濫という日常的な皮膚感覚に頼らずとも、記号に関する学が、キットラーの著作を最後に、90年代以降ほとんど目立った理論的展開を見せていないように思えるのが、その証左ではなからうか。記号の意味作用を問う学にかわって、おそらくそう遠くない未来、何か別のツールが必要になってくる（批判的な学の制度というものが存続していれば）。そのようなときに「ロシア文学」を、ノスタルジーや惰性からではなく、どのように研究することができるだろうか。

乗松亨平による本書『リアリズムの条件』は、まことに困惑させる以上のような問いを鋭敏に感受し真摯に思考する、その志の高さで私たちに驚かせる。問いへ応答するために

---

<sup>3</sup> 岩本和久（「遠ざかる他者」『図書新聞』第2959号、2010年3月27日、4頁）、中村唯史（『ロシア語ロシア文学研究』第42号、2010年、80-83頁）による本書の書評、および沼野充義の文章（『ロシア語ロシア文学研究』第42号、2010年、84-85頁）を参照していただきたい。

提示される方法は大きく二つである。まず①文学テキストを「私（たち）」を形成するメディアとしてとらえること②そうした主体化の過程において、文学テキストがその読み手を抗いがたく拘束する力——誘惑の作用に注目する。言い換えれば、「表象の（「虚偽」的）内容ではなく、表象とそれに囚われた主体との関係性」[296]へと目を向けること。こうした指針に沿って、文学テキストを媒介として構築された「現実」が「私（たち）」を生み出し拘束する、その歴史的諸条件が解きほぐされてゆく。このとき「カフカス」に関するテキストが選ばれるのは、単にロシア文学史という安定した制度内のいわば一挿話として、ポストコロニアル研究の視点が持ち込まれた、ということではない。本書はまさにそのような視点を問題にする。

著者は別のところで、貝澤哉（番場とともにもっとも早くからロシア文学研究の「場」を自覚的に問うてきた研究者の一人）による「言語化しえぬ外部を言語化しようとする欲望」としての「ロシア的なるもの」の析出に対置して、自身の方法論を次のように述べている。「外部と内部がいかに組織されいかなる関係を取りむすぶのか、その歴史的構成条件を逐一精査するならば、ひとつの主体には還元しえない諸断片が現れるのではないか」。<sup>4</sup> ロシア文学史という単線的な線などない。それはあることについて何かが言われうるという可能性のフィールドをかたちづくる、選択と排除の不安定で常に反復されなければならないプロセスにほかならない。それは内と外との接点ですらない。あらかじめできあがった内部も外部もないからだ。むしろ、内部と外部なるものはある特異な場所においてその土地が褶曲し、折り目をつけられることではじめて生み出される。内部と外部の区別が刻まれるこの特異点がテキストである。本書が依拠する言説分析という方法論は、ドゥルーズ（『フォーコー』）が指摘するように、きわめて地政学的だ。こうしてロシア文学という領土の境界は常に揺れ動く不安定なものになり、その内部は、内部と外部を隔てる標識を特異点に刻み、それを何とか集合化してゆこうとする探査隊の身振りによってしか維持されえない。

この意味で、「カフカス」についての文学的な表象およびそれについての批評的言説という本書の対象選択は、テキストの内部（言語）と外部（現実）という区別と、地政学的な共同体の内部（ロシア）と外部（カフカス）という二つのレベルの混同の効果としてロシア文学史というものが成立していることを明らかにする。

本書の目的は、しかし、このように言語による他者表象の欺瞞と不可能を暴露し断罪することではない。そうではなく、文学という近代的メディアのそういった特性を踏まえたうえで、いかにそこに「他者」あるいは「外部」、「現実」と関係するうえでの作法を見出

<sup>4</sup> 書評：乗松亨平「貝澤哉著『引き裂かれた祝祭——バフチン・ナボコフ・ロシア文化』『ロシア語ロシア文学研究』第41号、2009年、75頁。

してゆくのか、に独創的な賭けと困難がある。現実がほぼ常に「 $\square$ 」による圍繞を経て表記されるのも、著者の関心が、言語というフィルターを通過せざるを得ない、テキストによる構築物としての「現実」との付き合い方に向けられているからだ。

本書では、カフカスを表象する有名無名の文学テキストおよび同時代の批評言説、さらには研究史上の文献ができる限り広範囲に参照され、精緻な分析が加えられる。特筆すべきは、ロシア（ソ連）を含む欧米のものだけではなく、無視されがちな、日本語で書かれた先行研究が着実に網羅されているという目配りのよさである。ここにも、自らがその内部に巻き込まれている言説を能うるかぎり可視化しようとする著者の姿勢は徹底されているとみてよい。複雑で膨大なこれらの情報を手際よく処理し、そこから、「現実」としてのカフカスとそれを表象しようとする言語の関係は固定したものではなく、四段階の変遷を経ていくという結論にいたる行程は、見事としか言いようがない。すなわち、テキストと人生＝行為の区別がない親密な公共圏においては、「作者自身が見た」という行為によってカフカスというテキストの現実性は担保されていた（現実＝テキスト：現実 0）。しかしテキストの理解可能性があらかじめ確保された読者共同体の崩壊とともに、やがてテキストと行為のつながりは切断される。このとき、カフカスは言語によっては表象不可能な「真実」として、テキストの絶対的な外部に置かれる（現実＝触知不可能な真実：現実 1）。これに対し『現代の英雄』が位置する空間では、言語によっては意味づけられない「現実」が、真／偽という判断の彼方に繰り延べられ、「事実」というカテゴリーとして意味を帯びる（この「現実＝事実」（現実 2）は自立したものではなく、テキストの内部にたくしこまれては棄却されるという手続きが際限なく繰り返されることによる、すなわちテキストの操作による効果だということは特に注意しておきたい）。著者はここに文学／と／現実という、私たちにとってもなじみの深い、狭義のリアリズムの成立を見ている。

こうした粗い概観でも明らかなように、私たちがいまだその中にいるリアリズム的な「現実」観が成立するための諸段階を、言語による表象可能性という視点から鮮やかに分類して見せた手腕は、日本のみならず海外のロシア文学研究においてもほとんど類を見ないものであり、著者の大きな功績である。ではあるが、まさにこの「わかりやすさ」にこそ、本書が抱える困難があるのではないか。本書の依拠するフーコーは「何か言われうるための可能性の諸条件」を分析するにあたり、それを構成するさまざまな系を周到に交差させることで、歴史の滑らかで連続的な語りを内破することを試みた。けれども、その後の言説分析はしばしば、今まで知られていなかった対象を文化の枠組みにおける切断という「図式」によって整理し、むしろ小さな歴史を滑らかに語るためのお手軽なツールと化してしまうことがある。本書の目標とするところはロシア文学の内と外を生み出す歴史

的「諸条件」を明らかにすることであったはずだが、この諸条件とは、実質的に、文学における記号の体制と、それが生産・消費されるメディア環境との相関関係に限定されている。すでに膨大な量の資料が扱われており、これ以上を求めるのは非常に過酷な要求ではあるが、たとえば『言葉と物』に比べて言説を構成する系が少ないのだ。したがって、もしメディア環境の変化の記述が平板なものになってしまうと、言説のたえず変転する領域を構成する諸断片をつぶさに見てゆくのが本書の戦略であるにもかかわらず、やや滑らかにすぎる物語が連想されてしまいかねない。

たとえばカフカスを見ることと語ることを直接に結びつける抒情的な主体は、親密な公共圏の対応物であると、主にトッド、ハーバーマス、遠藤知己らのメディア論に依拠して語られるのだが、メディア環境とテキストの関係はこれほど透明なものであったのだろうか。センチメンタリズム（特にカラムジン）におけるサロンのコミュニケーションの表象についていえば、それはすでに作者と読者のあいだで対面的な関係が失われていたことへの補填であるとする指摘もある。<sup>5</sup> 声・文字・身体が滑らかに連続する「かのような」という擬制は、親密な公共圏のまさに不在が惹き起こしたものとは考えられないか（文章の見本となるような言葉を話す貴婦人の不在）。また作者と読者の親密な関係の崩壊は同時に、状況に応じた役割演技という演劇文化の終焉でもあり、この不在は作者という唯一のペルソナによってカバーされるという見取り図にしても、やや直線的であるように思える。作者のペルソナとは一枚岩の主体であり、そこにはペルソナを「演ずる」という契機はなかったかのようなのだが、ベストウージェフ＝マルリンスキイらにおいてアイロニーの問題は存在しないのか、もう少し詳しく知りたいと思った。

そしてじつはこのアイロニーとの距離のとり方にこそ、本書のライトモチーフが潜む。だからこそこの概念を、歴史化、あるいは精緻に定義することの、いずれかが必要だったのではないか。『エルズルム紀行』のプーシキンにアイロニーという語が使われるとき、それは表象の全能性に対する断念の謂いであり、レールモントフ（『現代の英雄』）の場合は真／偽の判断の際限のない遅延のことである。つまり、「アイロニー」という語は著者が提示する「現実」のおのおのの相に正確に対応し、その都度「現実」を構成する言語体制の負荷を背負わされている。著者は「虚偽」にもかかわらず必然的な「幻想」の「現実性」という位相を、「現実」の第四の相、「現実3」と呼び、そこに「自己が「内」にしかありえないと自覚しつつ、それをアイロニカルに捉えるのではなく「外」との関係性として生きること」[305]としての他者への誠実さを見て取っている。この文脈でのアイロニーは、おそらく後期ロマン主義（特に社交界小説）がはまった幻想の暴露と幻滅の悪循環

<sup>5</sup> Gitta Hammarberg, *From the Idyll to the Novel: Karamzin's Sentimentalist Prose* (Cambridge: Cambridge University Press, 1991), p. 12.

に等値されている。だがこれはアイロニーの過小評価といわざるを得ない。ドイツ・ロマン主義、特にF・シュレーゲルおよびノヴァーリスにおいて、アイロニーはまさに言語による被規定性を引き受けたうえで他者を志向することを、少なくとも一面としては持っていたはずだ。<sup>6</sup> おそらくこうしたアイロニー概念にもっとも近い実践をロシアにおいて行った作家の一人がゴゴリであろうが、ゴゴリが「社交界小説」も「カフカスもの」も執筆しなかった稀有なロマン主義作家だとはいえ、「リアリズムの条件」をタイトルとする著作においてこの作家がほとんど扱われていないのは気になるところではある。

カフカス表象をめぐる文学史において、唯一アイロニーが含まれない「現実」は、トルストイ『コサック』の言説空間に位置づけられる（現実3）。この「現実」はいままで三段階と比べ、やや異質な相にある。それ以前の段階において、著者は確かに、ロシア文学の内／外という区別の「手前」で、その区別を構成するための歴史的諸条件を観察し、「現実」としてのカフカスの三様態を描き出した。したがって現実3においても、言語と「現実」の関係のタイポロジーが期待される。実際、次のような記述はそのような期待に沿うかのようだ。「それは、つねにすでにテキストに媒介された「現実」であり、テキスト＝メディアの「内」なる「現実」である」[305]。

けれどもここでは何かが今までと違っている。それまで精査されてきたのは、「現実」を構成する記号システムの変遷とメディア環境の相関関係であった。現実3において実はこうした記号の体制そのものに変化はない。狭義のリアリズムは現実2においてすでに成立してしまっているのだ。言語とその外部との無限の往還の効果であり、その往還の果てに表象の彼方に想像される不可能な「現実」の体制として。このめまい、アイロニー、「スパイラル」の構造そのものは現実3においても変わらない。変わったのは、そのめまいを単に無限に重ねてゆくか、それとも外部からの留保を抜きに、めまい（繰り返し明らかになる現実の幻想性）そのものを生きるかどうかという、読みの姿勢である。

本書はここに一箇の倫理の誕生をみてとる。すなわち、「みずからの不自由な被拘束性、「内」の構成条件を問う意志」[305]の。著者のこの読みの倫理と、しかし、『コサック』の主人公についてなされる「虚偽を受けいれたうえでなお他者を欲望する態度」[297]、「幻想」の「現実的な強制力」[293]、「虚偽」が暴露されようと、「幻想」を捨てることはできない」[292]という観察とのあいだには、少なからぬ懸隔がある。ここでのオレーニンの「被規定性の認識」[296]とは、主体がテキストの内部にどうしようもなく書き込

<sup>6</sup> 「愛における第一の要素は、たがいを感ずる感覚であり、最高の要素はたがいを信じあうということである」。Fr・シュレーゲル（山本定祐編訳）「アテネウム断片 87」『ロマン派文学集』富山房百科文庫、1978年、40頁。これは、自らの想像でしかない、あるいは、同じことだが、常にすでに言語化されている、そのような他者との関係性を生きてゆかざるをえない、苦く、しかし希望に満ちた認識ではなかろうか。

まれ、しかしその書かれた生を生きていかねばならぬという自覚であろうが、これはフーコーの言う、先験的＝経験的三重体としての近代的な主体全般の意識ではないだろうか。「オレーニンはまだ [……] ここで考え行ったことが、「これじゃない」とは思わなかった」[295] と『コサック』の主人公について言われるとき、それはむしろ彼が「現実＝社会」という他者の幻想を生きることを決意する「大人」に成長するまでの、教養小説的な社会化の物語にも読めてしまう。ここから、「現実」が常にすでに言語でしかありえないことへの居直りが導かれることはありえないだろうか。表象の主体としての自己がある言説に囚われているということに自覚的であるのみならず、その言説の諸条件を分析することで他者との関係性を探つてゆこうとする本書の著者と、言説の拘束力に（その虚偽性を意識しているとはいえ）従ったまま他者を欲望とするオレーニンとでは、自他の関係性に対する目線にズレが生じているように思う。もっといえば、オレーニンの眩きから著者の言う倫理に跳躍するためには、オレーニンが欠いているもの、他者へ向かうための自己反省という意味でのアイロニーが、必要なのではないか。<sup>7</sup>

このように「現実」が言語的に構築される歴史的諸条件の分析が、読みの倫理の問題へと移し変えられることで、現実3の本書における位置づけは微妙なものとなっている。ここではまず、メディアによって構築された現実を（その「虚偽性」を意識しつつ）生きざるを得ない私たち「21世紀の大人たち」の日常感覚の基礎をなす言語の体制が記述される。と同時に、そうした感覚を他者と関わるうえでの倫理として語り直そうとする著者の賭けが行われる場ともなっている。『コサック』の少々強引な読みを通して、過去を現在として分析しようとする者に憑きまとう分裂が演じられるのだ。歴史から現在を生きる倫理を学び取ろうとする際のこうした苦闘にもかかわらず、ではなく、それゆえに、本書は数少ないすぐれた言説分析の一冊となる。というのも、自らが分析する対象に逃れがたく取り込まれているというループを意識して発見することで、現在を、他者との関係として生き直すこと、おそらくこれこそが、言説分析が私たちに教えてくれた最良の、そしてもっとも実践が困難な教へのひとつであるからだ。対象と関係を結ぶことへ向けられたこのまなざしにこそ、私たちが最初に立てた問い——「ロシア文学」を、ノスタルジーや情性からではなく、どのように研究することができるだろうか——という問いに向けての、ひとつの実践が確かに示されている。

---

<sup>7</sup> F・シュレーゲルは、おそらく彼のもっとも有名な断章のひとつであるアテネウム断章 116において、ロマン主義文学における反省の無限の累乗を、外部と内部の往還運動による「形成」として述べている。